

## 「青く光る聖櫃」

主任司祭 晴佐久昌英

今夏の教会学校のキャンプで、「聖櫃作り」をした。これが、思いの外味わい深い企画だった。

今年のキャンプは主日にかかっている、その日は司祭不在となるため、神学生に集会祭儀をしてもらうことにしたのだが、そのためには前日のミサで翌日分のご聖体も聖別しておかなければならない。しかも、聖堂のないバンガローでのキャンプなので、ご聖体を安置しておくふさわしい場所がない。ならば聖櫃を置こう、どうせならみんなで作ろう、ということになり、「聖櫃作り」という、おそらく全国の教会学校キャンプ史上例のない美しい企画が実現した。

「やるならちゃんと精神」あふれるリーダーたちは、何週間もかけて立派な聖櫃を手作りで用意したのだが、これが釘を一本も使っていない本格的なものだった。一度でも尊い聖櫃として用いた以上、その後不敬があってはいけない。キャンプ終了後には焼却することとし、そのため釘は使わない、というわけである。これに、当日子供たちがお祈りを書いた色とりどりの木の札を貼り付けて、出来上がり。

実際にミサの時、この聖櫃にご聖体を収めてろうそくを灯すと、まさにイエス様が宿ったキャンプとなり、感動した。子供たちにとっても、聖櫃とともにすごしたその夜は、イエス様とともにある特別な体験となったに違いない。

その聖堂がカトリックか、プロテスタントかを見分ける一番簡単な方法は、聖櫃を探すことである。聖櫃がなければ聖堂ではない、とは言わない。しかし、神が、目に見える人、手でさわられる人としてこの世に宿ったという神秘を真に理解している人ならば、聖体ランプの灯る聖櫃が聖堂に安置してあることの真の意味と意義を正確に理解できるはずだ。

神が、宿る。この恵み以上に価値あることなど、この世にない。聖櫃はまさにその恵みの象徴であり、究極的には聖体を拝領したキリスト者もみな、神宿る聖櫃なのである。さらに言えば、聖体を宿しているこの星自体が、聖櫃なのだ。神の子を宿した惑星、地球。満月の聖体ランプを灯して、暗黒の宇宙に青く光る聖櫃！ 宇宙人が聖体訪問に訪れても、ぼくは驚かない。